

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業
分担研究報告書

アトピー性皮膚炎診療ガイドライン：非ステロイド性抗炎症薬に関する解説の作成

研究代表者 下条直樹 千葉大学大学院医学研究院小児病態学 教授
研究協力者 藤田雄治 千葉大学大学院医学研究院小児病態学 医員

研究要旨

本研究の目的は、アトピー性皮膚炎の治療薬における非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）の外用药の現時点での有効性や副作用などを解説することである。

アトピー性皮膚炎の基本治療薬であるステロイド外用薬と比較すると抗炎症効果は極めて弱く、有効であるというエビデンスはない。また副作用として接触皮膚炎があり、湿疹を悪化させてしまう可能性もある。アトピー性皮膚炎の治療における NSAIDs 外用薬の有用性は乏しく、副作用を考慮すると使用は推奨されない。

われわれは、「アトピー性皮膚炎の治療アドヒアランス」に関して、PubMed や医学中央雑誌などのデータベースを用いて検索した情報や国内外の書籍、総説などの情報をもとに解説を作成した。

A. 研究目的

アトピー性皮膚炎の基本治療は保湿剤とステロイドの外用であるが、NSAIDs の外用薬も湿疹の治療に用いられることがあった。その有効性に関するエビデンスや副作用などについて解説する。

対して有効であるというエビデンスはない。欧米のアトピー性皮膚炎診療ガイドラインには NSAIDs は記載されていない。

また副作用に関しては接触皮膚炎が知られており、湿疹を増悪させてしまう可能性もある。特にブフェキサマク製剤は接触皮膚炎のリスクが高く、欧州医薬品庁から欧州全域にブフェキサマク製剤の販売中止を勧告がなされた。それを受けて我が国でもすべてのブフェキサマク製剤が販売中止となった。

B. 研究方法

アトピー性皮膚炎の治療における NSAIDs に関して、PubMed や医学中央雑誌などのデータベースを用いて検索した情報や国内外の書籍、総説などの情報をもとに、診療上重要な情報について解説文を作成した。作成した文章は、研究班員による議論と推敲を得て、最終版を作成した。

D. 考察

アトピー性皮膚炎の治療薬として NSAIDs が用いられることがあったが、その有効性に関するエビデンスはなく、接触皮膚炎などの副作用も考慮すると使用は推奨されない。

C. 研究結果

NSAIDs の抗炎症効果は、ステロイド外用薬と比較すると極めて弱く、アトピー性皮膚炎に

E. 結論

アトピー性皮膚炎の治療として NSAIDs の

使用は推奨されない。

F. 健康危険情報

副作用として接触皮膚炎の可能性がある。

G. 研究発表

<論文発表>

アトピー性皮膚炎の治療における非ステロイド性抗炎症薬に関する論文発表はない。

<学会発表>

アトピー性皮膚炎の治療における非ステ

ロイド性抗炎症薬に関する学会発表はない。

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定も含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他